



長崎原爆と伊東勇太郎

齋藤 一

伊東勇太郎^{いとうゆうたろう} (1889年～1980年) という英文学者がいる。長崎高等商業学校・長崎経済専門学校・長崎大学経済学部で英語を担当、第二次世界大戦後の新制大学移行期には要職を務めた人物であるが、長崎原爆に応答した人でもある。本稿は、現時点(2018年11月5日)で私(齋藤)が伊東と長崎原爆について理解していることの一部を本稿の読者にも知っていただき、長崎原爆を経験した知識人の役割について共に考えるきっかけとなればという想いを込めて書いたものである。

まず伊東の経歴・業績について知るために、伊東の名誉教授授与を伝える『長崎大学学報』第126号(1956年10月25日、1頁)に掲載された、「伊東勇太郎氏(前経済学部教授)に名誉教授の稱号授与」という、彼の1956年までの経歴をかなり詳しく伝えている文章を引用する。

昭和31年3月31日付で停年退官された前経済学部教授伊東勇太郎氏は大正13年経済学部の前身たる長崎高等商業学校教授として着任以来、32年にわたって英語及び英文学の講義を担当され、殊に新制大学発足当初においては経済学部長として本学の運営に多大の貢献をされましたが、今回その御功績と高潔なる人格に対し長崎大学名誉教授授与規定に基き、長崎大学名誉教授の称号が授与されることになった。

略歴 明治22年生長崎市、明治42年東京高等師範学校英語部卒業、大正10年大倉高等商業学校教授、13年長崎高等商業学校教授、昭和2年英語及び語学教授法研究のため英吉利國、希臘、及び亞米利加合衆國へ留學、4年歸朝、全年6月兼任長崎高等商業学校生徒主事、14年滿洲國出張、24年長崎大學經濟學部長、28年長崎大學評議員

この文章では伊東が具体的にどのような「英語及び英文学の講義」をしていたのかはわからないので、1956年の文章のあとに書かれた文章を引用してみる。

まず新聞や雑誌の訃報欄だが、例えば1980年11月8日付『朝日新聞』には「伊

東勇太郎氏（いとう・ゆうたろう＝長崎大学名誉教授）六日午後十一時十五分、老衰のため（中略）死去、九十一歳。（中略）英文学者でシェイクスピアの研究で知られる」とある。雑誌『英語青年』第126号第10号（1981年1月1日発行）も伊東の訃報を伝えているが、『伊藤勇太郎氏逝去』シェイクスピアの研究で知られる伊藤勇太郎氏は、11月6日午後11時15分、老衰のため（中略）で逝去。91歳。長崎大学名誉教授」とある（47〔551〕頁）。なお、以上の文章には個人情報も含まれているので適宜割愛した。

いずれの訃報も伊東をシェイクスピア研究者として紹介しているが、これは適切な紹介であろう。例えば、長崎高等商業学校・長崎経済専門学校・長崎大学経済学部の同窓会誌である『瓊林』に掲載された伊東に関する文章も、伊東先生といえばシェイクスピア、という文章が多いのである。実際、『瓊林』には、「三年の最終学年で先生はセークスピアの作品を教材とされ、「ハムレット」の講義ではセクスピア研究の造詣深さの感を強くした」（高橋一人「浅野・伊東・伊藤先生の追憶余話」、『瓊林』64号、1984年、16頁）、「生か死か伊東教授暗誦のハムレットの台詞耳に残り」（原田弘道「長崎回顧」、『瓊林』65号、1984年、47頁）、「ShakespeareのHamletとディッケンスのThe old curiosity shopを習った」（鳥越次夫「高商時代の思い出（その三）」、『瓊林』118号、2011年、53頁）などの文章が掲載されている。

ただし、伊東はシェイクスピアばかり研究・講義していたわけではない。上記の鳥越は伊東がチャールズ・ディケンズ『骨董屋』（1841年）を講読していたことについて触れているが、例えば長田俊雄「伊藤久秋、伊東勇太郎両先生を偲んで」（『瓊林』57号、1980年、138～9頁）は、伊東の長逝を慨嘆しつつ、学生時代に「コンラッドの文学評論集の中で特に『ロシアの小説論』を講読された。無味乾燥の中学受験英語を勉強してきた私には単なる英文和訳ではなくて、和漢の知識を披歴されての解説には全く驚いた（中略）又三年生の時はカーライルの衣装哲学（サター・リザータス）を講読された」ことを回想している。また、徳山宣也「伊東勇太郎先生の思い出」（『瓊林』103号、2003年、12～14頁）は、高校で伊東の特別講義を聴講したあと、1953年に長崎大学経済学部に入學、伊東の授業ではトマス・ド・クインシー『阿片常用者の告白』を習ったことを記している。

以上紹介した文章は、長崎大学経済学部で長年務めたベテラン教員であり、ウィリアム・シェイクスピア、トマス・カーライル、トマス・ド・クインシー、チャールズ・ディケンズ、ジョゼフ・コンラッドなどの名だたるイギリス文学者の作品を講読して学生に強い印象を残し、「和漢の知識」にも詳しくだったという伊東の姿を伝えるものであるが、彼が長崎原爆について応答していたことは上記の文章の中には出てこないのである。

そもそも私が伊東の名前を知ったのは、2016年夏、『日本の原爆文学』全15巻（ほるぶ出版、1983年）を読んだのがきっかけであった。長崎原爆を直接・間接に経験した英米文学者について調べていた私は、第13巻の185頁に、「創痕のあめつちアーネスト・ロブソン」という訳詩を見つけ出したが、この訳が伊東勇太郎によるものであった。以下、伊東の訳文と解説を引用しておく。

癒ゆるには大きすぎる傷があり
傷痕きずあとも残さぬ浅手もある
空間大の機能障害を蒙って
苦痛、激情、追憶は太りゆき
命のいやはての没落の瞬間まで
吾等があるままの吾等を創りゆく

歴史の悲惨事の並樹路を通り眺めやる
苦悩と痛苦を感情によって理解せんため
必要なる傷の深浅と種類とを
一点一劃の微にいたるまで測定し得
また人類の夢魔を通して打ちふるう
人間の受苦の全音階を把握し得るならば――

しかもなお人生の愛を喪失するなく
この地獄なす衝撃に打堪えん気根を持ち得んか
若し死者が、墳から立ち上ってでも来るように
生者に対するその呪詛の重荷から解放され得るならば
彼等の苦しみと吾等の苦しみの亡霊は
彼等の また吾等の罪を尋ねて現わるるものなのだ

その時こそ星は星霧に還元するだろう
あたかも身体の戦慄が
心臓の律動に伴って打揺るごとく
は
将た吾等の時計のからくりがばらばらに落ち離れて
肉の細胞が時間を測り出し
歴史が吾等の時計とならんごとく
(伊東勇太郎訳) (185頁)

訳文のあとに記されている解説も引用する。

原題は Wound Time。当時、長崎経済専門学校（長崎大学経済学部の前身）英文学教授であった伊東氏の訳。伊東氏の解説によれば、アーネスト・ロブソンは米軍赤十字勤務員として、サイパン、テニヤン、沖縄の戦場を巡歴しており、長崎に進駐してのち、「さらに大いなる人類の悲劇、原子爆弾の跡に立ち、“癒ゆるには大きすぎる傷があり”とその心境を詩うたのである」という。（『長崎新聞』一九四五年一二月）（同上）

現時点ではアーネスト・ロブソンの「米軍赤十字勤務員」としてではなく詩人としての業績が不明であり、何より 'Wound Time' なる作品の英語原文を私は見えない。現時点ではわからないことが多すぎるため、このことについては別の機会に論じることとして、本稿では伊東のロブソン作品訳について『日本の原爆文学』13巻が記載していることのみを紹介することにとどめておきたい。

次に、旧・長崎医科大学正門門柱の碑文英訳について触れておく。長崎大学の学内広報誌『学園だより』に掲載された記事は（青木義勇「由緒を訪ねて〈⑦〉」、『学園だより』第26号、1972年1月1日、3頁）、爆心地に近かったため甚大な死傷者を出した旧・長崎医科大学の正門門柱にはめこまれた大理石に刻まれた碑文（以下の鍋島の記事を参照）の英訳は伊東の手になるものであることを伝えている。この碑文とその英訳について、碑文の考案者である鍋島直共（長崎大学名誉教授）が『学園だより』第59号（1977年9月30日、3頁）に投稿した、「いしぶみのひとつの記録——長崎原爆にちなんで」より適宜引用したい。まずはその冒頭部である。

わたくしの手許に、もう約二十二年程もたった古めかしい一枚の原稿用紙がある。わたくしが大切に保管して来た原稿の一つであることには間違いない。それには——一九四五年、昭和二十年八月九日、よく晴れし日の午前十一時二分、世界第二発目の原子爆弾により、一瞬にしてわが師、わが友、八百五十人有余名が死に果てし長崎医科大学の正門門柱にして、被爆当時の儘の状態を生々しく此処に見る。一九五五年 昭和三十年八月九日 誌之 とある。（3頁）

当時の長崎大学学長古屋野宏平と医学部長北村精一に依頼されたというこの文章は、強烈な爆風で傾いたままの正門門柱のプレートに、伊東による英訳とともに刻

印され、現在でも「被爆当時の儘の状態を生々しく」伝えている。

鍋島のエッセイで重要なのは、彼がこの碑文を考案するときに「色々な都合で、ほんのその骨子だけの短い記録的なものに終わった」（同上）ことを明記していることである。

色々な都合と言うのは、端的な表現が人に訴える迫力も強い場合もあろうし、それに、この碑文を書いた当時は、終戦からまだ約十年位しかたっていない時代だったので、敵愾心をあふるような言辭は勿論避けねばならぬし、そうかと言って、馬鹿でない限りあちらさまへの迎合的な意味の語句も言えたものではない。それにしても、二十年の後、三十年の後、この大学の原爆記念碑の前に立つこともあろうあちらさま外人のことを思う時に、執筆者としてのわたくしは、何等かの将来への配慮も起草するに当たって、必要であったことは確かであった。そんなことなどで、中々碑文の構成が進捗しなかったことは本当である。

要は昭和二十年八月九日、十一時二分、長崎浦上の上空約四九〇Mで炸裂した原爆火球直径約七〇M、温度三〇〇、〇〇〇度の熱線、放射能、爆風をうけ、惨死された入院患者・医学徒・教官・医大職員関係者、その他の外来者への慰霊供養の切なる念と平和の悲願をこめて、永久に残さねばならないこの碑文のペンを取った。「わが師、わが友・・・」は、そんな身近なえにしにつながる親愛なる人々の意味合いに理解してほしいし、「一瞬にして」や「被爆当時の儘の状態を生々しく此処に見る。」などの文句で、非人道的な地獄さながらの惨状を推察してもらうよすがともなれば、筆者としては幸である。（同上）

以上の引用の内容をまとめるならば、鍋島は、碑文を読んだ者を過度に刺激せず、また当時の世情に鑑み、アメリカ合衆国に対する「敵愾心」を煽らず、しかしアメリカ合衆国に「迎合」しない文言を考えるのに苦心した、そしてその苦心は碑文の中に書き込んだ「わが師、わが友・・・」、「一瞬にして」、「被爆当時の儘の状態を生々しく此処に見る」といった言葉に読み取ることができるということになるだろう。この鍋島が抱えていた「色々な都合」については、当時の文脈に即してより具体的に論じる必要があるだろうが、本稿では伊東の仕事について触れておきたい。鍋島は次のように文章を続けている。

因に、わたくしのつたない碑文を、大学当局は元経済学部長伊東勇太郎先生（名誉教授）に英訳してもらった。ここに、わたくしは伊東先生への敬意と感

謝の念をこめて、その見事な英訳を紹介しておく。

Here is preserved the Entrance-Gate of the former Nagasaki Medical University as it was just after the explosion of the Atomic Bomb the second one in history, which instantaneously carried off the lives of our dear Professors and Friends, numbering over 850. The lamentable event occurred at two minutes past eleven o'clock on a fine morning of August 9th, 1945 (20th year of Showa Era).

Inscribed on August 9th, 1955

(同上)

鍋島は伊東の碑文英訳を「見事」だと評しているが、鍋島の評価を一旦留保して伊東の英文を検討したい。まず問題にすべきは、鍋島の原文「被爆当時の儘の状態を生々しく此処に見る」を、伊東が Here is preserved (the Entrance-Gate of the former Nagasaki Medical University) as it was just after the explosion [...] と英訳していることである。つまり、鍋島の碑文にある「生々しく」という副詞が訳されていないのである。この言葉は鍋島が「非人道的な地獄さながらの惨状を推察してもらおうよすが」として書いたという言葉の一つであるにもかかわらずである。さらに、伊東が日本語の碑文原文には該当する箇所がない“The lamentable event occurred [...]”という文言を英訳に入れていることにも注目すべきだろう。長崎原爆は甚大な人的・物的被害をもたらしたのであり、まさに“the lamentable event”、つまりそれを直接・間接に経験した者や知った者に嘆きや悲しみ (lament) をもたらす出来事であるだろうが、それは碑文を読んだ者に長崎原爆の被害の状況を映像として想像させる力をもつ「生々しく」という日本語とはニュアンスが異なるだろう。

伊東の英訳に、鍋島の日本語原文に書き込まれた「生々しく」という言葉に対応する言葉がなく、原文にはない“The lamentable event occurred [...]”が挿入されている理由は、現時点ではわからない。現時点での私は、伊東、あるいは伊東に英訳を依頼した当時の大学当局にも「色々な都合」があったのではないかと推測するのみである。私は、この碑文英訳、そして伊東のロブソン作品翻訳については今後も調査しつつ考察を重ねていくつもりであるが、私一人の力では限界がある。読者からご意見を賜りたい、あるいは共に考察を深めていきたいと願っている。

※この研究ノートは、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）（一般）「長崎原爆に応答した英米文学者に関する基礎的研究」（代表：齋藤一、課題番号 18K00406）の成果の一部である。